

# 不二の心

——入出二門の源泉——

安田理深

行と信というものは一体である。一体というのは、名号として一体である。そういうことをお話していたのです。親鸞はですね、この長行に於いて建てられた一心をですね、一体であるけれども、建てた一心というものは、名号を体としているんです。一体であるけれども、しかし、一心というものは発起ということがある。名号は、時を超えているのです。名号というものに建てるには、聞ということがあります。「聞其名号」ということがあります。名号を通して、名号の本というものに触れる。そういうところに、一心というものが成り立ってくるんです。

聞というのは、但、話を聞くのではないのでありまして、「衆生、仏願の生起本末を聞く」と。聞というのは、「衆生、仏願の生起本末を聞く」と言われているように、衆生という意味があるんですね。本願を起こされた、そして、名号を我々に回向された、本願の御心というものに、もう自分が見出されておる。我々が本願の教というものを聞いて感動する。ただ話を聞くなら、何も感動ということは無いですけれども、やっぱり本願が初めてある。初めてのものの、そこから本願力が起こって、そこへ帰ってくるというのは、そういう中に、自分というものを見出していくことだ。ただ、縁もゆかりも無いものの本願を聞くということではなしに、自分に関係するから感動するんですね。自己

に關係するものに感動というものがある。我々が本願に触れて感動するというのは、何か本願というものと、自分というものと、深い因縁があるということです。遇然に出くわしたものでなしに、如来が本願を起こされた、そこにもう自分がいたとか、或いは、この自分というものから本願が起ってきたのだということです。我々は今いるし、本願は遠い昔ということではない。「乃往過去久遠」というように書いてありますけれども、しかし、それが実は同時である。それが聞いて感動するということです。聞くのは、今聞くのですけれども、聞いて本有の如来の本願に目覚めるのです。その目覚めたところに一挙に、それは今である。こういうようなところに感動というものがあるのです。自分の都合じゃない。本願というものと我々とは、聞いた時が始めて触れたのではない。聞くというと、そこにですね、もう曠劫已来深い因縁というもので結ばれていたということです。必然の關係があった。たまたま犬が棒にあたりといったものではなしに、やっぱり、そこに時が熟した。時機到来して今という、そういうような意味があるわけです。この一心には、時というものが入るのです。だから『論』の方では、「一心」と書いてあるし、それから經典の方では、この「一心」を、「一念」と言っております。「聞其名号信心歡喜乃至一念」という言葉で表わしています。一念というときが大事です。その短い時を「一念」というわけです。ここに經と論とが、互いに相照らし合っているのです。經典の方には時であらわしてある。

一念の信。一念に聞かれた信というのは、一というの、不二というような意味ですね。我々が心を一にしたのではない。不二の心です。日本語でいえば、一心とは、ふたごころがないというような意味になります。ふたごころないという意味は、つまり、二をやめて一にしたというのではなく、二のままが一という意味です。如来と我々は、橋は掛からない。我々を延長しても如来にはなれない。絶対にそこには衆生と如来、或いは機と法という、その間に大きな溝があるけれども、その溝をやめて一というのではない。絶対に結合はできないという二が、そのままが一である。こういうような意味で一心ということが言われるのです。

天台宗の經典の中に「不二の法門」ということがあります。不二の門ですね。二にして二ではない、それが仏教の一と云うのです。仏法の一というのは何であるかというところ、不二ということですね。二が二でない。二のままが一である。「如」ですね。二のままが一如。一如の心ですね。一如の心を賜わる。我々が努力して一にしたというようなのは、賜わるものではない。自分の中に作った心だ。だからこれはやっぱり、我々の煩惱悪業の衆生の心は散乱麁動で、それを無理して一にしたのは、これは午前中お話ししたように、「自心」というようなものでしょう。自分で決めた一心です。だけれども、本當の意味での一ではない。努力で一にしたのではない。

午前中申しましたように、名号によって一心を建てる。それだからその一心が不二の心なんです。名号を離れて一心というものを考えるならば、それは自心ということですね。それは、信心を名号に加えるということになります。名号の外からね。それではやはり念仏を信ずることではない。言葉では念仏を信ずると言っているけれども、念仏と信心が、体は二つになる。行と信とは、機法の二は混乱を許さない程の区別があるけれども、二のままの一だ。だから南無阿彌陀仏というものに、我々が心を統一したものを頂くのではない。乱れたままでいいのです。散乱麁動のままである。それを統一して本願を信ずるのではない。散乱麁動のままでも、本願に目覚めるのならば、その散乱麁動の心がそのまま一心だ。また散乱麁動の心を統一出来るならば、名号はいらない。

『浄土論』の上では、一心というような意味が特に出ておるのですが、經典の方では「一念」です。時という字で表わしています。時機到来して一心というものがある。だからあらゆる衆生が時機到来すれば一心が開けるようになっていて、自分の努力で開いたのなら、誇るといふようなことが出来るし、また誇るような心が開けない場合には、嘆くといふことがあるのです。嘆き悲しむといふことがあるのです。それから一生懸命、得たいといふことで急ぐとか、そんなようなことがあるような気がする。そういうような心というのは、時を無視した心です。時というものはどれだけ急いでも、時が来ないと開けない。時が来ればもう開かないといっても開く。そういう所に時機到来とい

ことがある。

もう一つ大事なものは、そういう意味ですけれども、親鸞が特に一心という言葉を、非常に深く、意義をもって御覽になったということは、やっぱり何回も申しましたけれども、一心というものは『阿弥陀経』に出ているのだから、『阿弥陀経』でよさそうなものです。「一心不乱」という。だけど『浄土論』の一心というものは、本願が成就した一念の信心だという意味です。本願成就の一心だ。本願は三心です。至心・信楽・欲生です。三心の願が成就した一心である。こういうような意味で、まさしく天親菩薩が経験されたところの本願成就の文である。「願生偈」というのは、天親の本願成就の文である。こういうので、三心に対して一心ということ深く御覽になると思うんです。『浄土論』の上では三心ということはないんですけれども、しかし、ここに入出二門ということが出ている。入出二門といううなことは五念門ですね。一心・三心ということは出ていないけれど、五門という。一心に対して五門、一心というものを解釈して、五念門というものを見出してこられた。『浄土論』ではそうなっている。だからして一心という言葉も非常に大事だけれども、そこに入出二門という五念門の意義が述べられている。だからこの偈文の題目も、『入出二門偈』です。そういうものに対しての一心という。入出二門というものをそなえている。それが「一心」という。そういうわけで、一心と言っても、自心というものとは違う。廣大無碍の一心と言ってある。そして、「廣大無碍の一心を宣布して、雑染堪忍の群萌を開化したもう」のです。雑染堪忍の群萌、一切群生海を開化された。一切衆生と言ってもいいのですけれども、一切群生海、群萌海、という言葉で表わしたのですね。

「世親菩薩は、大乘修多羅、真実功德によって一心に帰命したまえり」と書いてある。「願生偈」では「我」ですね。我一心に帰命すると。しかし、その「願生偈」を結ぶところを見てみると、「我れ論を作りて偈を説きて、願わくは、阿弥陀仏を見たてまつり、普く一切の諸の衆生と共に、安楽國に往生せん」と、こういう回向の言葉をもって結んである。一番初めの、「願生偈」の二行は、一番終りの二行と相對する。文章上、形式上ですね。初めの二行は、

終りの二行と相対応しているのです。文章の形からしてね。そして、「観彼世界相」というところから正説分が始まっているんですね。そういう構造になっています。このことは、前に何度も申しました。つまり言ってみれば、初めは「我」を述べたもの。「我」を述べたものですけれど、次第に「観彼世界相」というような、三種莊嚴功德というものを通して、最後は「普共諸衆生」という。初めは「我一心に無碍光如来に帰命して、願生安楽國」と、天親に願生の一心というものが起きたように見えるのですけれども、最後に行く、「願わくは、普く諸の衆生と共に、安楽國に往生せん」と、やっぱり願往生ですね。一番おしまになると、「普く諸の衆生と共に願生せん」という具合になっています。

一心を聞いて不可思議光如来というものの、本願の内面の御心というものを通ってみる。そうすると、信によって願に触れて、そしてその願というものを今度は生きるということになる。信心というものは、初めから見ると願に帰するといけど、願に帰するといのは、帰した願に生きるということ。これは願にぶら下がっているということではない。そういうように如来の御心に生きるのです。自分の私心に生きるのではない。私心を克服して願心に生きる。こういうような意味をもって来るから、廣大無碍の一心というのです。如来にぶら下がっている一心ではなしに、如来を背負って立つような一心である。こういうようになってくる。これは面白いことだと思いますね。

五念門でもね、初めは「善男子、善女人」なんです。五念門の行というものを修行すると、こういうことから始まっているんです。だから五念門の行というものは誰が行ずるかと言えば、善男子、善女人です。善男子、善女人と言ったら、宿善開發の者という意味です。普通で言う意味の善人・悪人という意味ではないのです。宿善開發です。つまり本願に育てられた衆生ということ。時機純熟した衆生です。そういうような意味で善男子善女人という。だから体から言えば、普通の人です。特に在家じゃないですかね。男・女ということがあるのだから、やはり在家の生活者というような意味ですね。選ばれたという意味ではない。在家の生活者です。それが五念門の行を行ずる。特別

な人じゃないです。そういう具合に始まるのです。

ところが五念門の行というものが、始めは善男子善女人から始まるのですけれども、今度は終わる所になると、「菩薩」という言葉に変わるのです。「菩薩」というようにね。善男子善女人が五念門を行ずると、その五念門の行によって行ぜられる行によって、善男子善女人が菩薩に位付けられるのです。人間が仏道を求める、仏道を歩む。聞法するということですけれども、衆生が仏道を歩むと、その歩む仏道によって、歩まれる仏道によって、歩む衆生が菩薩に転ぜられるわけです。歩む人は誰でもいい。商売人でも百姓でも、何でもいいわけです。しかし、歩む仏道というものが、歩む人を菩薩にする。人間に力があつたのではない。

天親菩薩も阿弥陀仏に帰する場合は、やっぱり凡夫でしょう。誰でも本願力に帰命するという場合は全部が凡夫なのです。凡夫でなければ阿弥陀仏の本願に帰するわけにはいかないのです。天親菩薩でも龍樹菩薩でも、本願というものに立ったら、全部が凡夫というものにかえて本願に帰する。凡夫を超えて本願に帰するのではない。凡夫を超えたら人は本願に帰せないのです。そういう人には、本願は要らないのです。浄土の道というのは、愚者にかえて往生するという。凡夫にかえて往生する。凡夫に成ってじゃない。凡夫にかえてです。本来の自己にかえる。そして本願に帰する。天親菩薩は確かに菩薩なのです。そう言われていきますけれども、「願生偈」の立場は、天親菩薩が、私は菩薩だということを言っているわけではない。やはり凡夫の立場に立って本願に遭遇された。そして「願生偈」を造られた。その造った「願生偈」で、天親を菩薩にするんです。だから天親菩薩だけではない。法蔵菩薩がそうです。だから法蔵菩薩は初めは、法蔵比丘というのです。世自在王仏のもとに於いて出家して、法蔵比丘となった。歴史上の仏陀というのは、近いところでは釈迦牟尼仏ですから、それで釈尊以前の仏さまを、全世界の中に仏は満ち満ちているといっても、人間には分からないから、釈尊というものを通して、釈尊になぞらえて仏というものを考えるより仕方がない。釈尊がそうであつたように、いわゆる王の位を捨てて出家した。そして沙門となる。出家して

沙門となる。家を捨てて、王の位を捨てて沙門となる。それで比丘という。法蔵もやっぱり比丘である。釈迦牟尼もやっぱり王宮を出て、そして比丘とられた。そういうような人です。これは物語です。

王様というようなものは、これは道を求めるというようなことはないのです。昔から日本の天皇でもみんな道を求めない。位は天皇です。王と言いますけれども、しかし、仏道というものに向うと、王位というものは消えてしまうのです。凡夫です。それが非常に健康なのです。天皇というのは位を意味するのです。国家を代表するという位を天皇というのです。人は天皇でも凡夫です。そこに混乱がない。天皇そのものが神様だというのは、それは明治政府が作った神学というものです。独裁的神学です。明治になって人間が作った平田神道と言いまして、国家神道によって作った天皇神学なのですね。それは人工の宗教なのです。政治的主張から作った宗教なのです。そういうことが暴露された。暴露されたとは、第二次世界大戦で負けたということです。第二次世界大戦で負けたということが、それが人造宗教であったということが暴露された。初めて出発点がそこで帰ってきた。戦争に勝っていたら本当はできないのです。だから天皇が人権宣言を、つまり自分は神ではないという勅を出された。それは戦争に負けたということが出されたのです。これはつまり明治政府で作った偽造宗教で、それに天皇家が利用された。歴代の天皇はあのようなことを言っていない。位は天皇であるけれども、体は凡夫である。その臣下と同じ凡夫である。そこに混乱がない。

だから法蔵比丘もやっぱり比丘ですから、普通の人です。それでみなさんも知るように、釈何々と。釈尊の教団は釈何々といって戒名をもらうのでしょうか。つまり日本と違ってインドではバラモンから階級がある。これは世界の名物、インドの名物と言われるくらい厳しい戒律ですね。インドにはある。そして一番最後の位にも入らない者を、網からもれた者を「旃陀羅」という。インドで今でもある。登録も何もしていない。そういうのがインドにはいるのです。ちょっと世界に例がないです。最高はバラモンといって、バラモン階級というのが最高の階級なんです。バラモンという意味は、西洋の言葉では「祭司」です。祭司階級。こういうようなものはカーストと言いまして、社

会の組織です。これは容易に例のないような厳しい制度です。それを積尊が破った。だから日本の人はあまり知らないけれども、外国ではキリスト教の世界でもやっぱりインドの仏陀は人類の教主であると言う。イエス・キリストと並んで、仏陀は人類の教主であると言う。これは認めている。どういふふうに認めているかと言うと、本願を説いたとかそういうような話ではなくて、その四制の階級を破ったということです。これは外国人には驚嘆に値するのです。つまり今日言う自由と平等という、平等を実現したのです。自由と平等と、そういうようなものを実現した。自由と平等というのは今日でも言います。そういうときに、仏陀というのが人類の教主であるという意義を言う。それを仏教の教団では、出家する以前にはどんな階級でも、上は王様から、下は乞食までいるのですけれども、一遍積尊の教団に帰したら平等である。全部がすなわち積尊の名前を頂くわけです。积何々というのでそれを実現したのが、仏教の教団というものです。

教団に階級があるわけではないのです。大僧正とかそういうことを言い出したのは、後になってからです。昔は平等なのです。それに、順序・秩序というものを破壊したのではない。平等の意味というのは、アナーキズムといった意味ではないのです。だから、そこへ上下の礼儀というようなものが保たれる。だから何か秩序がないと具合が悪い。それを大僧正とか、学校に出ているとか出ていないとか、そんなことで付けたのでは差別になる。それで、出家した年齢、そこに法臚と云うてですね、血液上の年齢と区別して、出家の年齢というものを別に立てられました。だから坊さんの年齢を教える時には、生まれて何歳というのは書きはしらない。出家何年、それが新しい年齢になるわけです。だからそこに上下の秩序というものがあつたのです。先輩と後輩というような。これも別に理論というものじゃなく、いかにも自然なのです。先生というようなことを言うようにですね。先生と云うて、年の上の者に対して年の若い者が礼をもつてする。これは理屈ではなく極めて自然です。だから理論でそのようなものが立つたのではない。極めて自然な年齢によって区別する。だから年齢の区別というのは時間ですから、別に兄貴だから違いとか、時間が先だか



ら偉いとか、時間が後だから劣っているとかいうことはありはしない。みな平等です。

だからして、信心を頂いた者も、頂かない者もです。頂かないと言っても、落第生とかいう意味ではない。時節が到来しないのです。早く頂いたのは、別にその人の手柄ではない。時間です。時機純熟して、つまり善男子・善女人になって、宿善開発して信を取る。別に修行して偉いから信心を頂いたということではない。だから別に自慢するわけにはいけません。自慢するわけにはいかなければ、悲観する必要もない。自分が作ったものなら自慢する。そして得られなかったら悲観する。信心が自分で作れるものだと思うからそうなる。信心というような信ならそうですけれども、一心というのは、如来の心を頂くのです。つまり不二の心です。如来の心を賜わる。如来の心は願心です。願心を賜わったものを、一心という。我々の信心です。南無阿弥陀仏を生み出した願心に帰る。南無阿弥陀仏を通して、南無阿弥陀仏の根に帰る。そうすると帰った願心というものが、帰った衆生の上に信心として成就する。本願成就です。三心の願心というものが、一心として成就する。だから頂いたものが我々の心ではないのです。如来の心です。信心というのは、ものじゃないのです。品物ではないのです。自己なのです。それで「我」という字を書くのです。「我一心」と。我と一心とを区別せずに説いてある。「我一心」という。『教行信証』の中には、「天親は建めに我一心と言えり」と言ってます。曇鸞大師でも、天親菩薩の一心という言葉を引きられる時に、いつでもただ「一心」と言わず、「我一心」という。我と一心を離さない。「自督の心」という。監督の督という字ですから、自ら督励するということです。督励する。「我一心」を「天親菩薩自督の心」と言っている。我というのは自我です。自らを督励する。そういう意味で自督の一心。自覚と言ってもいいです。我々が信心を賜わると、信心の方が我々を督励するのです。我々が信心を開くと、開いた信心がかえって我になる。これまでは、我は我だと思っていたけれども、そうではない。信心を頂いてみたら、信心の方が我である。それで、かえって我と思っっている方が汝となる。逆になる。位置が変わるのです。「汝一心」と言っ、信心自身がかえって我々を督励してくるのです。人から励まされるのではなく、信

心自身が励ましてくる。そういうようなことが自覚の一心です。

信心というのは品物ではない。つまり言ってみれば、これまで自分に生きていた者が、今度は本願に生きるようになる。本願に目覚めて、目覚めた本願というものに生きる。こうなったのです。それだから大きく立場が変わってきただけです。無始より已来、我々は、ふたごころに生きていたのです。善悪の二つの心に生きていた。善いか、悪いかというような心に生きていたのです。ところが、念仏を通して、ふたごころではない。二のない一の心が変わってきただけです。立場が変わってきたのです。だからそういうのを回心という。

信心というのは、回心という意味があるのです。回心がないと信心にはならないのです。聞き憶えになる。信心と聞いてからも自分、本願を聞いても、その本願がわかった自分になる。だからして聞くだけでは、信心というものはなりはしない。聞くのは百人いれば、百人ながら聞いている。けれども、聞く人が皆信心を得ないでしょう。信心というのは、得た人が得ているのです。聞いた人がみんな得はしない。聞くのは百人がみんな聞くのです。それで、聞くように公開されているのが念仏ということです。特別な人に与えているのではない。信心を得るように、万人に胸を開いているのが念仏です。老少善悪の人を選ばないと言ってあります。だから、胸を開いているのだけれど、開いている念仏を聞いて、信を得る人は全部ではない。得る人は得る。それはそこに、自分を発見した人が得る。回心した人がひっくり返る。そのひっくり返るところに、信仰というのは決断というものがある。ただわかったというようなことでは、信仰にはならないのです。決断です。

二河白道という話があります。あれは、善導大師が信仰を体験された記録です。あそこでは、死して生きると言います。死して生きるということがつまり回心ということです。「すでにこの道あり。必ず度すべし」と言った時に二尊の声を聞いたという。これは、信心も決断だけれど、本願も法蔵菩薩の決断なのです。それで、願というものに

「誓」という字がついている。「誓願」と。如来の決断です。如来と言っても、午前中申しましたように、南無阿弥陀仏です。南無阿弥陀仏というものが、因位にくだるのです。衆生になる。因位というのは、つまり凡夫になるという意味です。仏が凡夫となって、そして衆生を仏にしようとする。凡夫になるといつ決断があるのです。片手間で助けるということはない。如来が助ける為には、その衆生が素直な衆生じゃないのです。雑染堪忍の衆生とは、煮ても焼いても食えない衆生です。そういう衆生というものを、どこまでも依り処とするという。願を通してです。その衆生を見捨てないのです。こんな奴とかいうわけではない。流転の衆生というものを、出離の縁あることない衆生というものと、自己とを約束するのです。それが誓いです。誓いという字が如来の決断だ。『歎異抄』で言うと、「たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなざよ」ということです。

帯を締めるとか、ふんどしを締めるということがあります。それは自分を縛るのです。自由に縛るのです。別に人が縛ってくれるというものではない。自分で自分を自由に縛る。そこに力が入るのです。それで自由に働けるようになる。なんでもかんでも自由だからといってすっ裸になると、かえって力が出せないのでしよう。あんまり自由すぎてね。やはりそこに自由に本願を起こす。起こした本願というものををもって、自分を限定するのです。約束するのです。本願を起こすのは、仕方なしに起こすのではなく、自由に起こす。一切衆生を救おうという。何も衆生に頼まれたわけではない。自分で起こす。その本願をもって、むしろ自分を約束する。自分自身とするのです。自分の本願と運命を共にする。そういうところに力というものが成り立つのです。それは「果遂」というような言葉で表わされています。「果遂の誓い、良に由あるかな」、助けずにはおかないというような力です。そういうところに力というのが出てくる。我々にとっても、本願に目覚めた、ああわかったということなら、信心にはならないでしょう。そのわかった本願をもって自己としようと。つまり、如来の方は本願を起こすのに命がけだ。我々聞く方もまた命がけでないといけない。そういうところに力というものが出てくる。

親鸞は、「廣大無碍の一心を宣布して、あまねく雑染堪忍の群萌を開化す」という。そこに、我一心だけれども、我は単なる我ではなしに、「雑染堪忍の群萌を開化する」ということがある。善導は三心について、「自身は現に罪惡生死の凡夫」と言う。「自身」という言葉があります。信仰というものの自覚だということです。「自身」という言葉で表わしてあるでしょう。「自身」とは、「自己の身」という意味です。「自身」と。天親菩薩でも、我という時は、「我が身は一心に」という意味なのです。字が略してある。「正信偈」でも、源信僧都のところに、「大悲倦きことなくして、常に我を照らす」と書いてあります。あれは実は偈文ですから、やっぱり言葉が入らないので、本文は「我が身を」なのです。「大悲倦きことなくして、常に我が身を照らしたもう」。我というときには、身という字がある。書いてなくてもです。「我は」と書いて、「我が身は」というふうには、身ということがその中にはある。だからして、『歎異抄』でも身という字がついていて、「そくばくの業をもちける身にてありける」とある。身というのは、宿業の身なのだ。そういう身に本願をいただくのです。宿業の身に本願をいただく。こういう意味があるのです。善導大師は、我が身と言っているのだけれども、もつと根源にいくと、因位の願心というのは如来自身を否定して、一切衆生の立場に立つ。だから一切衆生をもって我が身とするという意味です。だからして、「そくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける」というのは、そくばくの業をもった衆生を我が身としようと、これが法蔵菩薩の決断です。それに感動するわけです。感動せしめるだけの力が、そこにこもっている。だから今『観経』の三心積では、善導大師は、機の深信を「自身は」と言うてある。

ところが本願の三心、如来の因位のお心を述べてある「信巻」に於いては、「自身」とは言わずに、「一切群生海は」という。一切群生海というものに於いて、機の深信というものを明らかにしてある。これは別々にあるものではないのです。やはり「自身は」と言う時には、一切群生海をもって我が身とされた。如来のお心を書いてある。そのお心に目覚めたのです。だから「我は」というのは、何も「わたくし」という意味じゃないです。信心というのは私事で

はない。そうするとさっき言ったように、自心になってしまふ。私心というのと、それは自心になる。我というのは自心ではなしに、公ということ。私ではない。公の心ですね。こういう意味がある。公の心であって、秘密な心ではない。人には言えないような深い心だというような秘密な心ではない。開かれた心です。やはり如来の心です。我々が体験しても、如来の心を体験する。如来の心というのは、一切衆生に公開された心である。秘密の心じゃないのです。だからして、「自身は現に罪悪生死の凡夫、出離の縁あることなし」というのは、暗い心じゃないので、明るい心なのです。我々のように、自分の根性で解釈するものだから、だめなものだというような意味になってしまふ。それは私心というものです。自分流に解釈しているのです。だから、罪悪深重というのと、暗い心だと思うのです。そうではなく明るい心である。罪悪深重というのを嫌うから暗い心になる。だから人間では嫌うより仕方がない。自己嫌悪です。自己嫌悪してみても、それしか自分はない。しかしそれでは自分は浮かばれない。このことを繰り返しているのです。いつでも自分で自分の心をゆり動かしている。無始よりこのかた流転しているわけです。

計いが計いを生んで流転している。それはつまり言ってみれば、遊びです。そういうのは暇人です。自分の内をゆり動かしている。それは私心というものです。そうではない。罪悪深重と言ったら、一切衆生を背負って立っている明るい心です。逃げ出そうなんて考えないです。永遠に触れるということです。流転を引き受けた心だ。公明正大な心である。それをなんか誤解してしまっているのではないかと思えます。機の深信というのと、何か、人間を暗くする心だと思うのですが、そうではないわけです。地獄を嫌う心が暗いのです。地獄におちた心は明るいのです。だから、あまりいい例えではないけれど、泥棒が警官に追いかけられて逃げる時は、暗いのです。泥棒になってみないとよくわからないけれど、ところが実は巡査に捕まえて欲しいのでしょう。巡査から逃げていようだけれども、本能では捕まえて欲しいのではないかな。逃げる心は辛いから。あっちへ行ったり、こっちに行ったりするのだから、一日も安らかな心はないでしょう。だから矛盾するようだけれども、分別では逃げていようだけれども、本能は捕まえて欲

しいのではないかと思う。だからして、捕まった時には、やれやれと安心するのではないかね。まあ、えらい例だけでも。漫談みたいになってしまっても。そういうようなもので、地獄におちはしないかと思う心が暗い。おちた心は明るい。地獄とは、それより下が無いという所を地獄というのです。下が無い。だから地獄におちた人間は、上がるように道は残っているわけです。立ち上がる所なのです。おちた所が、そこが立ち上がる場所なのです。そういうところが機の深信という。立ち上がるのは法の深信でしょう。

「一切群生海」という言葉が出ていて、そこに公の心を示す。信心は機に属している。機というのは別に私という意味ではない。他力と信心というのは、公の心である。自力の信心というのは、私の心という意味である。それが午前中言いましたように公の心だから、弁護する必要のない心です。弁明する必要はない。だから案外静かな心ではないかと思う。「急作急修して、頭燃を灸うがごとくすれども、すべてこれ雑毒の善」だということを、三心釈でいってあるでしょう。「急作急修」というのは、急ぐのだ。そういうのを自心というのです。急ぐというのは、努力で信仰を得ようとするからです。信仰というのは、努力で得られるものではない。時に賜わるのです。自力の努力ではない。仏法のご苦勞に賜わるのです。

本願に目覚めてみれば、目覚めた時に本願があるのではない。目覚めなくても、本願があったことに気付くのです。我々が勝手に流転していると思うけれども、我々の流転も本願に支えられてきた。そして流転している間に、自然に時機純熟している。我々が信を得るのは今だけれども、得てみると、その間に曠劫已來の一つの歴史がある。

こういう具合に、一心というものは、一つの背景があるのです。つまり私的な心には歴史がない。歴史がない個人的なもの。ところが、公の信心というものは歴史がある。不可思議兆載永劫という歴史がある。如来のご苦勞という歴史のことです。私の心というものはそんな歴史がない。妄想などは何度繰り返しておっても妄想です。ゼロを足したものだ。ゼロを百万足してもゼロだ。歴史はありはしない。空転しているだけです。歴史はない。一が二とな

る。二が三となるというところに歴史があるのだけれども、いつまでもゼロがぐるぐる回っても、歴史にはならないでしょう。

だから一心と言っても、我々に賜った一心だけれども、我々を超えているのです。如来の心は廣大無碍だけれども、それに目覚めるのは、各人各人が目覚めるわけです。信心には、いっぺんに目覚めるということはない。講習会などで、いっぺんに信心を頂くということはないわけです。やはり時機到来して頂く。そういうことをいうと、自力でだめなものなら、棚からぼたもちで待っているかというように考えるかもしれないけれども、努力して得られないものが、怠けていたら、なお得れないのです。だから、そういう怠けるのも、努力するのも、そういう意識の中には時がない。時は、あなたがた考えてみても、お百姓の人がよく知っているように、一日でも作物が遅れたら、なかなか、それをとり返すのが大変なことになるんです。みんな競争して田植えするようなものですから、一日遅れたら、えらい違いです。一日の遅れをとり返すということは、後で出来ないのです。それだからして、植えた稲を負けないうように伸ばしたというような逸話もあるみたいです。それ程、時というのはあんまり急いでも、成る時は早くと言っても成らないし、それならば、そのままにほったらかしていると一日遅れてもだめになってしまうのです。

だから時というのは、早いものか、遅いものかわからないのです。そうでしょう。時というのは、早いものか、遅いものか、ちょっと見当がつかない。早いとか、遅いとか言うのは、分別が言うのでしょうか。時を分別する心が早いと言心には、早い遅いがあるけれども、時そのものに、早い遅いがあるわけではない。だから、不可思議兆載永劫という。ものも一刹那だ。というわけです。一念という。不可思議兆載永劫といったら、たいへんな時間でしょう。しかし、一念の他にそういうものがあるわけではない。それで「乃至」とつけたのだ。ただ「一念」ではない。乃至一念だ。こういう具合に一念と言ったら早いようだけれども、しかし、一念の中に、不可思議兆載永劫という、「劫」という意味を持っているのです。

短い方は刹那です。刹那とは念です。一刹那は一念です。だから不可思議兆載永劫と言っても一刹那だ。一刹那を不可思議兆載永劫に繰り返すのです。不可思議兆載永劫というのも一刹那である。一刹那を不可思議兆載永劫に見出した。乃至一念一刹那。こういうように、時間というものは、非常に不可思議なのです。これが如来の心を賜わるのですから、如来の三心の心を賜わるのですから、それでやはり、一切群生海を開化したもうという力、徳をもってゐる。

天親菩薩は、何も一切群生を助けるとか、そういう考えを起こして、信心を起こしたわけではないけれども、天親菩薩が、名号を通してそこに本願を頂かれた。その本願の心を頂いてみると、それは実は、一切群生海というものを代表した願心である。何も特別な人、天親菩薩だけに得られるものではないということを表わすのでしょうか。「一切群生海を開化したもう」と。つまり言ってみれば、天親菩薩が信心を頂いたということが、一切群生海を救おうという本願を証明してくださったのです。だからして、我々と無関係に天親菩薩が一心を頂いたというなら、ああそうかというようなものです。人の話です。我々に先立って、我々の頂く信心というものを、あらゆる衆生がそれによって救われていくという信心というものを、我々に先立って示してくださいました、証明してくださいましたという意味になる。だから末代の衆生というものを親鸞は代表して、天親菩薩に感謝を表現された。「あまねく雑染堪忍の群生海を開化する」というのは、末代の我々を開化してくださったと言って、天親の求道心、天親の聞法に感謝された。そういう意味があるので。

だから天親が頂かれたけれども、頂いた天親のものではないのだ。その一心が、廣大無碍の一心が人類を救うのです。こういう意味を持っています。そういう意味がずうっと出ているのですけれども、「願生偈」全体が、「彼の世界相を觀するに」というようなことが出ている。これがみんな、一心の廣大無碍を証明しているのです。こういう内容を持っている。一心の外から付け加えてきたのではない。一心というものが展開した世界です。つまり浄土です。一



心の心境をこれから明らかにする。廣大無碍の心境をこれから明らかにするから、廣大ということが出てくるのです。廣大ということが、非常に大事である。深いということもあるかもしれませんが、親鸞は並々ならぬ注意を「広い」という字に置いておられます。深いというよりも、広いということです。深いというのは、悟りが広いのです。悟りが深いのです。その深い心が広いというのは、一切群生海を包むものだ。それで広いのだ。特別な人だけというものではない。

一切群生海というのは、形容詞で言ったいうものではないしに、宿業の衆生という意味でしょう。業というものは、各人各人が作るのだけれども、各人各人が違うのは、業が違うからでもありますけれども、しかし、業によって各人各人が結ばれるのです。各人各人を区別するとともに、各人各人を結合するのが業の自覚です。仏教の例えですけれども、水というものがあると。これは飲みものだと、こういう具合に我々は考えます。でも魚にとっては水は飲みものではなく、住みかだ。魚にとっては水は住みか。人間にとっては飲みものだ。どうしてこんなに違うのだろうか。業が違うからでしょう。魚と我々との業が違うからだ。業感ですね。業で感ずる水が違うのです。それで我々にとっても水だ、貴方にとっても水だという、共にこれ人間だということになる。そこで結び付くでしょう。だけど魚とは区別される。人間とは結びつく。こんな関係の区別です。

やはり、業というものに於て、皆が感応するのです。運命を共同するのです。あらゆる人類が運命を共同するのです。一人の業というものはないです。業というものが、自分自身というものと、一切衆生を結び付ける。日本人でも、日本という民族の運命を共同しているのです。運命を共同するところに日本人がある。人類というのもそうです。

だからして如来の因位といっても、それはやはり、如来が衆生の宿業の運命を背負う。そういうように、如来の本願というものは頭で考えるのではなく、宿業を通して感ずるのです。願いというものはね。自覚といってもただ頭で考えた自覚ではない。業を通して感ずる感覺的自覚です。理智的に分別して、本願はこんなものだと判断するもので

はない。全身全霊をもって感ずるのです。その業というもので流転しているわけだ。流転しているというのは、自分を失っているわけです。本来の自己を失っているわけです。自分の作った業というものに打ちひしがれているわけです。

業というのは過去の業です。「自身は現に」と、現在をおさえているのですが、現在の身というものを内観してみると、曠劫已来常に流転しているという過去がある。現在の中に、曠劫已来という字が出てくるのです。流転というのは、我が身が過去以来の歴史を背負っている、こういう意味です。過去からの業を背負って、我々が現在まで生きているという意味は、それがつまり宿業の自覚だ。過去を背負った現在だ、という自覚です。そういう時は、投げ出されているということではないかな。我々が生きているということは、そこに投げ出されているという意味だ。そういうものではないかと思えます。生死しておるのではないのです。生まれさせられて、死なさせられておるといふ。全然自由がない。我々は生まれてきたと言うけれども、誰も生まれて来た者はおりはしない。自分の業によって生まれさせられておるのだ。論より証拠で、生まれようと思つて生まれた者は一人もいない。気が付いたら生まれていたのです。我々の分別で生まれてきたのではない。分別を超えてそれは与えられた。投げ出されたのです。

だから業というのは、分別を超えているという意味だ。我々が生きているというのは、生きているという分別を超えているという意味なのです。分別なんかの力ではないものが我々をあらしめている。こういう意味です。我々は、自分の妄想分別で生きているのではない。妄想分別は、暇人が勝手に描いているだけの話だ。現実というものは、そういうものではない。現実はずっと厳しいものだ。こういうことの自覚が宿業です。つまりそこに過去のということがある。人間は過去の的にある。そういうことを言ってみれば、投げ出されている。被投と言います。投げ出されてあるというようなことです。過去というものは、被投というようにことを表わすのです。投げ出されているというのは、サイコロを投げるといふような意味です。業をつくるということとは、サイコロを投げるようなものだ。サイコロの中

に自分の未来が賭けられているのだ。ひとつの賭博でしょう。自分を賭けているのだ。そういう意味のものだ。厳肅なものだ。旅の恥はかき捨てというわけにはいかない。何をしても自由だけでも、した限りの責任を負わされていきますから、サイコロを投げるようなものです。

日夜間断なき業をつくっているのです。いい加減な、借金を払えるというようなものではないわけです。それ程重い身なのです。勝手に我々が自由だと、煮て食おうとも、焼いて食おうというの、俺の自由だと。こんなことを思うのが考えるということだ。そんなものではない。そういう考えは己知らずですね。よく考えてみれば、そこへ投げ出されている。Geworfenheitと言つて、これは werfen という意味です。これは投げるといいます。これは動詞です。その過去受動分詞です。Geworfenheit、つまり被投という言葉です。

考えてみると、こんなことが衆生の現実というものです。要するに、今まで投げ出されてきた。ならば未来はどうか。未来は投げ出されないのかというと、そうではない。最期の日まで投げ出されているのだ。曠劫已来流転してきて、また未来永遠に流転していくのだというような意味です。

人間から言えば、人間にはそういう自覚が成り立たないのではないのでしょうか。人間から言えば、そういうことを分別するというと、分別で絶望するのです。絶望するのは分別です。分別が立たないので。そういうふうに絶望しないのが、願心というものです。人間が流転したくらいで絶望しない。絶望するのは人間です。絶望したり、やけになったり、悲観したりするのは人間です。願心が悲観することはない。悲観と言つても本當の意味の悲観、大悲観はするけれども、絶望はしないでしよう。だから如来の心というものは、人間がいかに流転しても、絶望しない。どこまでも流転していくのです。だから衆生は流転していると言つけれども、させられているわけです。だから流転するのは願心でしょう。人間は流転するのではない。流転させられておるのだ。その流転させられておる衆生に絶望しないのです。それは流転する心です。つまり流転すると言えば、もう流転を超えている。流転させられているから流転

しているのであって、流転すると言えば、もう流転を超えているでしょう。流転を超えているような行為だけが流転していけるのです。同じものだけれど、我々は流転させられている方だし、流転する方は、如来が流転する。そういうようなものです。分別はどちらにも入らない。流転させられると思っではないし、流転するとも思っではないのです。妄想というのは、実体は無いものなのだ。ただ心に描いているだけだ。妄想とは何もありはしない。内容は空転だから。だからそのような意味を、一切群生海を開化するというのではないか。いい加減な事ではない。全然姿を見れば、そこに投げ出されているような衆生です。

群生海と言うと人間だと思いますが、人間ではないのです。人間もその中の一人。虫けらに至るまでという意味です。生きとし生ける者。昆虫や動物に至るまでが一切群生海。普通の意味の博愛というものではない。そんな安っぽいものではない。一切群生海、皆、宿業によって流転しているという意味に於いては、平等なものです。つまり言ってみれば、地獄・餓飢・畜生を包んでいる。そういう衆生が全部自分を失っているでしょう。そういう衆生に、本来の自己を回復させる。どっこい我々も生きてるのだ、こういう自信を与える。こういうような願心と言いますか、そういう一つの流転を通して、流転を逃げずに、しかも自己を回復する。自己を回復すれば、初めて流転させられておる者が、流転する心になる。流転を背負って立っている心になる。それが如来の心でしょう。つまり法蔵菩薩の心が、衆生の上に生きてきた。みんなが法蔵菩薩になることです。そんなような意味が一心ということにある。それでそんな意味が広大無碍と言ったり、それから群生海を開化するとかいうことです。

そう言われてみると初めて、宗教心、信心とか信仰とかという意味があなた方にわかりますでしょう。安楽浄土に生まれて楽になるのだと、そんなことを言ってもわからないでしょう。それがなぜ信仰なのか、それは勝手な欲ではないかと考えるでしょう。生きとる間は勝手に欲を増やすし、死んでからもまだ安楽に生まれたいというような厚かましい欲ではないか。だから現世利益というのは、宗教心でも何でもない。人間心なのです。現世利益というも

のは、非常に悪いのは、偽似宗教です。それはかえって、本当の宗教を妨げるのです。純粹なる宗教を妨げる。本当に人類と一つになって生きる。清沢先生の言葉があそこに書いてあります。「天地と我と同根」「万物は我と一体」という清沢先生の言葉が書いてありましたが、つまりそういうような意味です。世界と共に、世界と一つになって生きるというのが「廣大無碍の一心」である。そういう意味がわかってくるのではないか。助かりたいというような、そういう勝手なものではないということです。そういうあらゆる一切衆生というものを背負って立つというような、そういうお心に救われるわけです。感動するのです。そういう時に初めて人間は、幸福など放棄するでしょう。助からなくてもいいと。大慈悲に感動するのだ。そういう本能の自覚というものが、信心の本質である。助かりたいというような、功利的な行為ではないということです。学者がそういうものを起こすのではない。そこらの毎日あくせくとして、宿業に従がって、汗をたらして生きている。労働する人々が、そういう身でありながら、それを超える。それが絶対自由だ。不幸を避けて、幸福を求めるとか、そういうような分別に生かずに、世界と我と一体だから、何ものにも頼らない人間、そういう何ものにも頼らない、独立独歩の信心をそこらの労働者が開くのです。それは一つの驚異ではないか。偉い人が開くのではない。何も無い、名もない人が、そういう一つの絶対自由の心境に立つということが、南無阿弥陀仏の信心である。それは我々にとって驚嘆すべき現実です。

「願生偈」は歌ですが、歌というのは、何か称讚するという意味だろう。称讚するという意味もあるのですけれども、やはり一心というものの頂いた徳を称讚する。一心というところに、南無阿弥陀仏の徳が輝いている。それで称讚するのです。称讚するという意味には、光り輝くという意味があるのです。尽十方無碍光如来に帰命するという、つまり、光というものがそこに出ています。廣大無碍の一心というのは、光り輝いている一心です。光り輝いている。廣大無碍というのは、徳を称讚するのですから、だからしてやはり、光り輝くというような徳なのです。だから廣大無碍というのは、さっき言ったように、私の無い、公開された心というような意味ですけれども、尽十方無碍という、

そういう如来の徳が光り輝いているということが、そのものが一心の内容になっているのです。そうすると、そこに廣大無碍というような仏の徳が、一心の徳というわけにはいかないけれども、一心の利益になるのです。徳というのは法について言うのでしょから、廣大無碍の徳が一心の利益となる。だから廣大無碍の徳を讃嘆すると言えば、それで歌になる。そこに、利益になっているという意味からは、感謝するという意味になる。その感謝というのは、価せずして賜わるという意味です。それに価せずして賜わる。自分の力で、特権ではない。むしろそこには願心というものの中に在りながら、曠劫已来流転している。曠劫已来流転して、最後に本願に遇うというのではない。始めから本願に在りながら、始めから流転しているということだ。長い間流転してきたけれど、これから本願に遇うということではないです。本願の中に始めから在ったので、しかし、始めから流転している。こういうような意味です。

だから感謝と言っても、ただ物をもたらったという話ではなしに、本願の中に在りながら、本願というものを知らなかった。知らなかったということを知る。ただ知らなかったというのではない。知らないということは、逆に言えば、本当のことを知らなかったということは、知らなくて損をしたという意味ではなしに、本当のものを知らないと嘘を本当にするのですよ。さかさまになる。逆立ちするのです。だから本願を知らないということが、迷う原因だったのです。自分を力としてきた。力のない自分に頼っていたのだ。それは本願を知らないからです。本願を忘れ、むしろ本願の中に在りながら本願を拒否してきたわけでしょう。だから背くという意味です。人間は背いてある。しかし本願の方は背かない。こういうような意味を含めて、感謝ということなのです。だからして善導大師は感謝を表現して、「大いに須く慚愧すべし」と、こういう言葉で感謝を表現しているのです。ただうまいことしたという意味の感謝じゃないのです。勿体ないことであったという意味の感謝です。「大いに須く慚愧すべし」と言う。

こういうように、歌というものは、光り輝く徳を述べるというものだけれども、それはやはり自分の得たものから、感謝として見れば、そこに大きな懺悔というものを通して感謝してある。親鸞の『教行信証』の最後に、「悲喜

の涙を抑えて由来の縁を註す」というようなことが出ている。ただうまいことをしたという意味ではないのです。やはり涙を流さないではおられないような懺悔をもって感謝する。願にはこういうような意味があるのです。

だからして、光り輝くという根底には、力がみなぎるような、しかも人間の闇ではない。人間は闇がわからない。衆生の泥沼の中に埋投しているような願心というものです。泥の中に埋投するけれども、泥ではないのです。光なのです。闇は単なる闇ではない。闇の中に光の根がある。だからして深い心というのは、闇の中に隠れているからわからないでしょう。光というのは外から降ってくるように思うかもしれないけれども、そうではない。外から降ってくる光の根は、闇に、大地にあるのです。外から光が降るのではない。大地を包むような光は、大地の中に根を保持している。光ということにはそういうような意味が込められているんじゃないかと思えます。なんか光に酔うというような意味ではない。光に酔うたことを歌ってはなしに、光でもって闇の深い心を讃えてあるわけです。大地から離れて広大があるのではない。大地の中に広大があるのです。大地の内面が広大なのです。大地の外が広大というのではない。人間はそれが分からないものだから、外の方に広大を求めて、自由だの平等だのということを探している。そうではない。内にそういうものがあるのです。

（本稿は、岐阜県慈光会主催の『入出二門偈』の会における昭和五十年九月五日午後の講義の筆録を整理したものである。  
文責編集部）